

令和5年3月6日

令和4年度 特別の教育課程の実施状況等について

都・道・府・ 県		
学 校 名	管理機関名	設置者の別
三木市立自由が丘小学校	三木市教育委員会	国・ 公 ・私

1. 特別の教育課程の内容

(1) 特別の教育課程の概要

小学校第1・2学年の「生活科」6時間を削減して、「外国語活動」に充てる。

(2) 学校又は地域の特色を生かした特別の教育課程を編成して教育を実施する必要性

三木市においては、次代を担う子どもたちに、ふるさとの歴史や文化、とりわけ伝統産業である三木金物の素晴らしさを伝え、我がまち三木市を愛する豊かな心を育むとともに、ものづくりを通じて自ら考え、生きる力を育成してきた。これまで取り組んできた「ふるさと教育」や「心の教育」を基盤として、今後のグローバル化に対応できる子どもたちを育むため、小学校低学年から「聞く」「話す」体験を中心とした「外国語活動」に取り組む。

(3) 特別の教育課程に基づく教育の実施状況

ア 実施体制

教科担任（外国語）とALTによるチームティーチングによる「外国語活動」としての指導を、学期に2回ずつ年間6回行っている。本校では、ALTは、月・火・木の週3回、3年生から6年生の授業を優先して配置しているため、これらの学年の授業がない時間を、1・2学年の指導の時間に充てている。

イ 指導計画及び授業の内容

三木市の「話せる英語教育」の年間カリキュラムモデル（1・2学年用）を参考に、教科担任とALTが事前に指導内容等を相談し、指導計画を立案している。その際、英語を初めて学習することや低学年であること、そして年間6回という回数等に配慮し、簡単な語句や基本的な表現を用いながら、教師や友だちとの関わりを大切にしたい体験的な言語活動を行うよう留意している。

言語活動で扱う題材は、児童の興味・関心に合ったものとし、他教科等で児童が学習したことを活用したり、学校行事や季節ごとの様々なイベントで扱う内容と関連付けたりするなどの工夫をしている。

毎時間、教科担任とALTとのチームティーチングによる指導ができるストロングポイントを活かして、コロナ禍ではあるが、ALTのネイティブな発音にできるだ

け多く触れさせながら、「聞くこと」「話すこと」を重視したゲームや歌などの活動を通して、英語を使った簡単な挨拶や表現に慣れ親しませることを目的とした授業を心がけている。

(4) 情報提供の状況

外国語活動の授業の様子については、学年通信やホームページなどで保護者に知らせている。また可能な限り、オープンスクール等で授業公開に努めている。顕著な学びの姿が見られる児童については、通知表の所見欄において文章表記によって知らせている。

(5) 特例の適用開始日及び、取組の期間

- ・ 特例の適用開始日 : 平成 28 年 4 月 1 日
- ・ 変更した特例の適用開始日 : 令和 2 年 4 月 1 日
- ・ 取組の終期 : 令和 5 年 3 月 3 1 日

2. 特別の教育課程の実施状況に関する把握・検証結果

(1) 特別の教育課程編成・実施計画に基づく教育の実施状況

- 計画通り実施できている
- ・ 一部、計画通り実施できていない
- ・ ほとんど計画通り実施できていない

(2) 保護者及び地域住民その他の関係者に対する情報提供の状況

- 実施している
- ・ 実施していない

3. 実施の効果及び課題

(1) 特別の教育課程の編成・実施により達成を目指している学校の教育目標との関係

本校の学校教育目標は、「志をもち ころ豊かに たくましく生きる子の育成」である。また、重点目標の一つとして「表現力の向上・・・様々な場面で、自分の思いを生き生き表現できる子を育成」を掲げている。これからの社会をたくましく生きていくためには、豊かな国際感覚、ならびに自分の思いを表現する力を身に付けさせることが不可欠であり、そのためには「対話の場」を設定することが必要である。

そこで、特別の教育課程を編成・実施し、1・2年生から「外国語活動」に取り組みさせることによって、外国語によるコミュニケーションによる見方・考え方を働かせ、外国語による「聞くこと」「話すこと」(対話すること)の言語活動を通して、コミュニケーションを図る素地を育成することができ、上記の本校の学校教育目標を達成することができるのではないかと考える。

(2) 実施の効果

毎時間、A L Tのネイティブな発音に触れながら、ゲームや歌などの活動を通して、楽しみながら様々な英語表現に慣れ親しむことができ、子どもたちは「外国語活動」の時間を待ち遠しく感じている。「聞くこと」「話すこと」、そして教科担任やA L T、子どもたち同士のコミュニケーションを重視した活動を多く取り入れたことにより、英語への抵抗感を持つことなく、自然と英語を発話することができる子どもたちが育ってきている。また、英語特有の発音を聞くことによって、日本語と外国語との音声の違いに気づき、言語やその背景にある文化にまで、興味を持つことができる子どもたちもいる。

今年度は、教科担任とA L Tとのチームティーチングによる指導を行い、より専門性の高い、系統的な指導が可能となった。また、教科担任が授業をコーディネートし、A L Tを活用した授業を展開することができた。さらに、電子黒板などのI C T機器も活用し、児童の興味・関心をうまく引き出しながらの指導も行うことができた。

4. 課題の改善のための取組の方向性

本年度をもって、この特別の教育課程の編成ならびに実施は終了となる。1・2学年での年間6時間ずつの実施ではあったが、中学年の「外国語活動」に向けて、自然と英語表現に慣れ親しみ、興味や関心を持たせることに非常に効果的な取組であった。

来年度以降低学年については、「外国語活動」という枠組みではなく、「国際理解教育」の一環として、生活科等の教科を中心に、A L Tを活用しながら英語に自然と触れ合える取組の実施にむけて検討していく方向である。